

東日本大震災から二年の月日をかけ紡がれた、希望と祈りの物語。

『そして、星の輝く夜がくる』

真山仁

2014年3月7日配本
四六版／272頁／予価1500円(税別)

被災地の小学校を舞台に描かれた、 六つの願い。

「まいど!」とぼけた挨拶とともに、神戸からの応援教師
小野寺徹平は、被災地にある遠間第一小学校の児童たちの前に立った。
東北の子供には耳慣れない関西弁で話す小野寺。
実は、小野寺自身も阪神・淡路大震災での被災経験があった。
生徒たちとの交流の中、震災後、被災地が抱える問題と直面し、
情熱とともに立ち向かっていく小野寺と子どもたち。
被災者の現実、原発問題、震災遺構、ボランティアと地域……。
子どもたちの視線をとおし見える、被災地の、日本の問題と歪み。
その混乱から未来へと向かう希望を描く、六篇の連作短篇集。

日本の根幹を揺るがした東日本大震災。
阪神・淡路大震災での被災経験のある著者が、
未曾有の惨事の中、作家として、ひとりの人間として、
今、書けること、書くべきこととは何か……。
自らにその問うたとき、この小説が生まれた。

<真山仁プロフィール>

1962年大阪府生まれ。同志社大学法学部政治学科卒業。
2004年熾烈な企業買収の世界を描く『ハゲタカ』でデビュー。
その後、『ハゲタカ』『ハゲタカ2』（「バイアウト」改題）がNHKドラマ化、
ハゲタカ・シリーズ三作目『レッドゾーン』が映画化されている。
その他の著書に、農政問題に切り込む小説『プライド』『黙示』。
政治の混迷、原発問題に迫った渾身作『コラブディオ』。
最新作に、昨年10月に刊行されたハゲタカ・シリーズ四作目『グリード』がある。

講談社刊